Doshisha Sports アトム
〒602-8580 京都市上京区新町上立売西入ル西大路町
TEL075-251-3185 ©同志社大学体育会機関紙
Doshisha Sports アトム
平成28年（2016） 同立戦号外
10/17 月曜日
http://doshisha-atom.net/
発行人 辻井智紀
編集人 小林洋貴

同立頂上決戦

同志社アトム

夜のわかさで吠えろ!!

同志社 投手陣

優勝条件：①同立戦で2戦2勝した場合 ②同立戦で2勝1敗となり、関関戦で関大が1敗でもした場合

立命打線 一斬ノ

強心臓エース 福島

ドクターK 平尾奎太

9月17日 対関大戦1回戦雄たけびを上げる福島㊨ 9月18日 対関大戦2回戦投球する平尾奎㊨（撮影・松浦美月）【切り込み写真】同試合投球する福島

プロフィールの見方▼①ふりがな ②学部学年 ③出身校 ④身長・体重 ⑤○投○打

平尾奎太

二塁手がゴロをさばき、一塁手が白球をグラブに収めた。速球を軸にした対京大2回戦。完封勝利を確信し、顔をほころばせた。

クールな表情とは裏腹に、内に情熱を秘める。練習もストイックに打ち込み、防御率は1.76と好成績を残す。走り込みを増やし下半身が強化されたことによって制球力がつき、三振を奪うシーンも多い。指揮官も称賛する投球術だ。

それでも課題は残る。走者を背負いピンチを迎えると、食い止められず失点を許してしまう。伝統の一戦では、ここ一番で踏ん張る粘り強さも必要だ。

大学野球ラストシーズン、有終の美を飾れるか。同志社の2枚看板の1人として一。立命大打線封じを誓い、その左手から渾身（こんしん）の直球が放たれる。

①ひらおけいた②法学部4年③大阪桐蔭高校④188㌢85㌔⑤左投左打

福島 平尾奎だけじゃない！厚いブルペン陣！

平尾拓也

同志社のリリーフエース、平尾拓也。彼の武器はコントロールの良さと抜群の安定感だ。常に平常心を保ち、正確な制球力で打者を抑える。

迫る同立戦では、1年生の時から悔しい思いをしてきた。「今回こそはリベンジを果たしたい」と気合は十分。打倒立命を胸に、彼の左腕がうなりを上げる。

①ひらおたくや②経済学部3年③彦根東高校④171㌢70㌔⑤左投左打

溝田悠人

同志社一のストイックな投手、溝田悠人。様々な球種での際どいコース、打者との幅急を武器とする本格派右腕。昨季開幕戦の関大戦では、1年生ながらも初登板をつかみ取った。

グラウンドに出れば誰もが主役。ルーキー・溝田にも十分にチャンスはある。若き力を爆発させ、立命大打線を封じ込める。

①みぞたゆうと②スポーツ健康科学部1年③履正社高校④172㌢75㌔⑤右投右打

松井孝太郎

今季の近大戦で、初登板初勝利を果たした松井孝太郎。彼の持ち味は、キレのあるストレートだ。夏に自身の球を磨き、「真っすぐのノビと制球がよくなった」と自信をのぞかせる。OP戦では好投を披露し、見事、今季ベンチ入りの切符を手に入れた。

彼の挑戦はまだ始まったばかり。初の同立戦での躍動に期待したい。

①まついこうたろう②法学部1年③大阪桐蔭高校④171㌢68㌔⑤左投左打

逆転V へ舞台を整えた。逆境をはねのけ、たどり着いた決戦の場。待ち構えるのは春に敗れた宿敵・立命大。3つの勝ち点も、優勝して初めて意味を持つ。わかさの夜に、白水組最後の戦いが幕を開ける。

ねじ伏せる

4年生に恩返ししたい。

福島孝輔

気持ちの表れた投球だった。低めの制球力を武器に、粘りの投球で幾度もピンチを切り抜ける。開幕のマウンドに立った福島は近大打線を8回途中1失点に封じた。それでも試合後、彼の発言は満足からはほど遠かった。「春の借りを返す」。勝利の気概を感じさせる一言だった。

優勝の可能性が残された春の同立戦、初戦を託されたのは福島だった。エースとして重役を担ったが試合は1―4で敗戦。目の前で立命大に優勝を許し、苦汁を味わう結果となった。「打たれたのは自分なので」。5回1失点の好投を見せたが、彼の表情は暗かった。

この悔しさを晴らすため、白水組の秋にかける思いは強い。自身も終盤に失点する課題を克服すべく、下半身強化を積極的に行った。「球のキレがよく、ストレートもいい」。本人の自信ある発言は結果にも表れている。5試合を投げ防御率は1・98と安定した成績を残している。

「4年生と一緒に神宮でプレーしたい」。春の雪辱はこのチームで果たさなければ意味がない。エースが投げ込む一球には、並々ならぬ思いが詰まっている。

①ふくしまこうすけ②法学部2年③大阪桐蔭高校④180㌢80㌔⑤右投左打

立命中軸

藤屋直征	高島勇弥	辰己涼介
打率:313	打率:231	打率:359
安打:10	安打:9	安打:14
打点:3	打点:8	打点:11

投手陣データ

10月17日現在

	チーム	福島	平尾奎	松井	平尾拓	溝田
防御率	2.10	1.98	1.76	0.00	4.50	2.57
投球回	73	27 1/3	30 2/3	2	6	7
奪三振	58	23	28	0	2	5
与四死	27	11	12	1	2	1
自責点	17	6	6	0	3	2

（関西学生リーグ 1.5日現在）	勝点	試	勝	敗	勝率
❶同志社	3	8	6	2	.750
❷立命大	3	10	7	3	.700
❸関　大	3	10	7	3	.700
❹関学大	2	8	4	4	.500
❺近　大	1	11	4	7	.364
❻京　大	0	9	0	9	.000

戦力分析

優勝で優勝を逃した春、明暗を分けたのは投手の制球力だった。無駄な四球が失点につながり、苦杯を喫した。雪辱を図るべく、夏場は下半身強化を重視した。成果は数字となって表れた。1試合あたりの四死球は4・5から2・5に減少し、チーム防御率も1点近く改善された。顕著な成長を遂げたのは、平尾奎だ。直球頼みの単調な投球から、今季は変化球の制球力が劇的に向上。カーブでカウントを稼ぎ、自慢の直球で打者を打ち取る。洗練された「大人の投球」を身につけた。防御率は1点台と安定感は抜群だ。同立戦でも0行進が期待される。

今季もエースの座を託された福島の投球術は健在だ。京大戦では6回1失点の好投をみせた。粘り強い投球で得点を許さない。春の同立戦は先制点を許したチームが敗北した。両先発の踏ん張りが力学となる。強力打線を封じ込め、勝利を手繰り寄せたい。

再起

驚異に挑く宿敵を、ぼうぜんと見ていることしかできなかった。5月21日、対立命大1回戦。伝統の一戦で、宿敵を相手に優勝を決める。積み重ねてきたシナリオはあっけなく崩れ去った。「秋に向けて立て直さないといけない」（白水主将・スポ4）。残されたチャンスはあと1度。最後の挑戦に向け、ナインは再びスタートを切った。

再始動し燃えるチームに影が差した。最終節まで優勝争いを演じた上での2位。もたらしたものは、自信だけではなかった。「慢心じゃないけど、5位から抜け出してどこか一安心という空気になっていた」（白水）。チームに弛緩（しかん）した空気が流れ始めた。春とは雰囲気を見せたが、昨年までは4季連続の2位。栄冠付いた自信粉はそう簡単に拭えるものではない。Aクラスを一瞬の到達点としてしまう心理が、チームの現在地を示していた。

チームを1つにしたのは敗戦の記憶だった。「優勝がかかる中で同立戦に敗れて、より勝ちたい気持ちが強くなった」（白水）。眼前で逃した栄冠が、下降線をたどりつつあったモチベーションを引き上げた。4年生を中心に何度もミーティングを重ねた。時には個人面談を行い、互いに本音をぶつけ合った。「全員の気持ちが一つになった」（白水）。ようやくチームが1つの方向を向いた。もう1度、リーグ戦を戦う準備ができた。

決戦

迎えた秋季リーグ、降りかかる想定外を1つずつ乗り越えた。主砲・井手が緊急離脱に見舞われるも、近大との接戦を制し開幕2連勝。関大戦で勝ち点を落とし苦境に立たされたが、すぐにチームは立ち直った。1つの敗戦が命取りとなる重圧の中、京大、関学大に連勝。試合を重ねるうちに状態を上げ、ついに逆転Vを射程に捉えた。下位からの脱出を図ろうと最言していた春のような勢いはない。光ったのはチームとしての地力の強さ。粘くさく、粘り強く、目の前の白星をつかみ取ってきた。手痛い連敗も、主軸の不振もチーム一丸で乗り越えた。追い風にさらされ続けてきたチームが、ついに順風に乗った。

最終節を前に3つの勝ち点。昨季と同じ状況でリベンジの機会を得た。「立命館に勝って神宮に行くためにやってきた」（井手・スポ4）。チームが変わったと言い切れるのは、この大一番に勝ち切ってこそ。1年間の改革は正しかったのか。自分たちが神宮にふさわしいチームなのか。1度は夢破れたわかさの地で、全ての答えを出す。（吉田勝）

自分たちが神宮にふさわしいチームなのか。わかさの地で、全ての答えを出す。

夏炉冬扇

▼この瞬間（とき）を35年間待ち続けた。東京ドームのレフトスタンドは真っ赤に燃え上がり、歓と歓声で揺れかえっていた。今シーズン、25年ぶりにリーグ優勝を果たした広島東洋カープ、その歴史は常にファンと共に歩んできた。▼1950年に12球団で唯一親会社を持たない市民球団として誕生したカープ。しかし、設立直後は財政難で存亡の危機に。そんな時に立ち上がったのがファンである広島市民だった。かの有名な「なる募金」によって球団を救い出したのだ。この事実は今もなおファンとの絆の象徴として語り継がれている。▼1975年に初優勝を果たし、80年代は第ヘル黄金期とうたわれた。だが近年では15年連続Bクラスに沈む強いチームとは言えなかった。時には厳しく、罵声（ばせい）を浴びせる事も。しかし、どんな時もファンは見放さず、声援を送り続けた。そして16年ぶりのAクラス入りを機に全国にカープファンが増え続け、「カープ女子」という言葉が流行語になるほどカープ熱が高まった。真っ暗なトンネルに迷い込んでいた時代をファンが何十年も支え続けてきたからこそ今があるのではないだろうか。そしてAシーズン、7度目のリーグ優勝に全国のカープファンが歓喜に沸いた。四半世紀という長い年月をかけて、チームとファンが一体となってつかみ取った栄冠なのだ。▼同志社硬式野球部にも学生、OBをはじめとした数多くのファンがいる。チームは優勝というゴールをつかみ取るべく猛練習をこなす日々を送っているが、ファンの存在無くして成し遂げることはできない。ファンの声援、熱に燃え上がるスタンドが選手の力となるはずだ。10年ぶりのリーグ優勝へ、同志社硬式野球部と共に戦おう。（今川将成）

◆お問い合わせ、定期購読のお申し込みは、http://doshisha-atom.net/ までお気軽に!!

アトムのtwitter @atom_doshisha
アトムのfacebook
レイアウト 豊田 大輝

'16秋 同立戦号外

石鎚会は同志社アスリートを応援しています!
毎週火曜日の整形外科外来は、同志社大学スポーツ健康科学部教授の北條達也先生が診察を担当されています。
医療法人社団 石鎚会
田辺中央病院
日本医療機能評価機構認定病院・救急告示病院・臨床研修指定病院
TEL 0774-63-1111
〒610-0334 京田辺市田辺中央六丁目1番地6
近鉄 新田辺駅から西徒歩2分・JR京田辺駅から東徒歩3分
http://www.sekitetsukai.or.jp
石鎚会 facebook ページはこちら

頑張れ!!硬式野球部
FOR THE DOSHISHA
みんなに夢と感動を!!
硬式野球部 OB会

同志社アトム 熱く、泥くさい 白水組 天下一名鑑 '16

全員キーマン

「一球一球に泥くさく」

今年の同志社打線にキーマンはいない。下位打線にも好打者がそろっており、どの打順からでも得点を奪える。月並みな言葉を使うは、全員がキーマンと言えるだろう。チーム打率はリーグトップの3割を誇り首位に立つ同志社の躍進を支えている。

好調の秘訣は言葉の徹底にある。1度でも多く出塁し、1つでも先の塁へ走者を進める。「点ではなくしっかり繋ぎになっている」（白水）。各打者が自らの役割を果たすことに全神経を注ぎ、全員で相手投手に圧を与えている。

その結果が、失策からの得点の多さに表れている。対関学大1回戦では、2死走者無しから4連打を放ち2得点。息もつかせぬ猛攻で相手投手をノックアウトした。「一球一球を無駄にせず、泥くさくいく」（井手）。主砲を含め、どんな好成績を残そうが打席における意識は変わらない。現在、想定打順に到達している人全員が打点を記録。全員がチャンスメーカーであり、ポイントゲッターでもあり得る打線は相手投手の脅威となっている。

「みんなやるべきことをやってくれている」（渡谷監督）。能力の高い打者がそろっているため、好投手を擁する立命大を前にしても特別なことをする必要はない。迎える頂上決戦。熱く、泥くさく、スローガンを体現する野球で勝利を呼び込む。

予想オーダー

1	一	辻
2	二	大西
3	左	福原
4	三	井手
5	中	白水
6	遊	平山
7	右	西田悠
8	捕	山岸
9	投	福島

16年度 白水健太 1

優勝しないと意味がない！10年ぶりに聖地・神宮へチームを導く立役者は主将・白水だ。第6節を終えて打率は4割超え。攻守における活躍は今年も健在だ。

「もう負けたくない」。その言葉に秘めた思いは計り知れない。全員が声を出す、ランニングの足をそろえる。凡事を徹底し、昨年までは4年ぶりに5位から脱却し、2位までのぼりつめた。チームは着実に成長を遂げている。白水の思いは確実にチームに浸透した。

1年時から同志社を支え続けてきた。大学野球に終止符を打つのはまだ早すぎる。熱くナインを鼓舞し、泥くさく勝利をもぎ取れ。

16年度 井手隼斗 10

主砲のバットからは、快音が鳴りを潜めていた。今季、開幕から7打席連続無安打と絶不調。対近大2回戦では自打球で途中交代を余儀なくされ、ふがいなさをかみしめていた。

「4番にいる以上調子が悪いでは済まされない」。原点に帰り、一球一球と真摯（しんし）に向き合った。関大戦では3試合で3安打、京大戦でも今季初打点を含む4安打と復調の兆しを見せた。直近4試合では打率5割3分8厘と、本来の姿を取り戻しつつある。

来る同立戦、主砲の活躍なくして勝利はない。「何とか僕がやらないとチームは上がらない」。4番としての覚悟を決めた男が、勝利へのアーチを描く。

16年度 大西友也 7

ラストイヤーとして最後の同立戦に燃える大西。彼の持ち味は強肩の守備だ。安定感のあるプレーで不動の二塁手としてポジションを確立している。またシュアなバッティングでの活躍も目立ち、攻守においてチームの土台となっている。

秋リーグ初戦では先制打を含めた3安打を放ち、チームを勝利に導いた。もちろん白眼の守備も健在。遊撃手・平山と阿吽（あうん）の呼吸でダブルプレーを量産している。

集大成に向け「2番打者としての役割を意識したい」。伝統の一戦で真価を発揮できるか。自分の役割に徹し、チームに勝利の風を吹き込む覚悟だ。

16年度 山岸大起 2

打った瞬間本能的にガッツポーズが出た。対近大1回戦。11回表、2死一塁の場面、フルカウントから打ち返した球はレフトの頭を越えた。この一打で勝ち越しに成功し、同志社に初勝利をもたらした。

秋季リーグ打率3割を超え、春季に続き今季も大いに活躍している。状況に合わせた打撃が功を奏し、何度もチームを救ってきた。8番を打つ山岸だが、「クリーンナップも打てる実力」と渡谷監督。同志社打線により厚みを与えている。

チームの扇の要である山岸。打撃でも、彼が軸になり、同志社を秋季優勝に導いてほしい。

16年度 平山拓磨 3

チーム随一の長距離砲、平山。昨季はリーグ4位の打率3割8分8厘を残し飛躍の春となったが、長打を意識しすぎた結果自らのフォームを失い、今季は不調があえいでいた。そんな彼が息を吹き返したのは対京大1回戦。先制を許しチームに重い雰囲気が立ち込める中、痛快な一振りで流れを変えた。初球を捉えた打球はレフトスタンドへの同点弾。この打席を機に従来のスイングを取り戻し、2回戦ともマルチ安打の活躍で復調を完全に証明した。

今季、同志社の逆転優勝にはこの男の打撃が欠かせない。そのフルスイングが追い風となり、チームを勝利へと加速させて欲しい。

16年度 西田悠貴 29

昨季才能を開花させた西田。代打での出場からレギュラーに定着し、打率3割3分5厘を記録した。四死球は辻に次ぐリーグ2位の9と、選球眼の良さには定評がある。

だが、今季は好機での凡退が目立ち、打率も1割9分4厘と苦しんでいる。1本ヒットが出れば不調を脱するきっかけになるはずだ。堅実な守備は評価が高く、欠かせない存在であるのは間違いない。彼のような不調の選手がトンネルを抜け出せれば、チーム浮上のいきっかけになる。同立戦の用兵は、彼にかかっているといっても過言ではない。不振にあえぐ男は、その一振りで、実力を再証明する。

16年度 辻心薫 9

スコアボードにいつもの名前が戻ってきた。1番ファースト辻。夏に事故で負傷し、戦列を離れていた同志社の起爆剤。対京大1回戦、復帰戦での先発起用に応えるべく出塁と、完全復活を予感させた。

昨秋のブレーク以降、主力として活躍を続ける。持ち味は通算打率3割を超えるアベレージの高さ。選球眼も非凡で、通算出塁率は4割と驚異的な数字を残す。球数の消費やカットといった武器も備える頼もしい1番打者だ。

東ら好投手がそろう立命大を打ち崩すには、好機で中軸に回す必要がある。リードオフマンとして打線に火をつけろ！

16年度 福原健太 35

放たれた打球が放物線を描き、レフトポール際に着弾した。対関大2回戦で大学第1号本塁打をたたき込んだ。

リーグ序盤、欠場していた辻の代役で起用された。その期待に応え出塁率5割と、切り込み隊長として存在感を見せつけた。対近大2回戦、2死満塁の好機で迎えた打席。「初球から振っていく」と言葉通りに引っ張った打球はサードの頭上を越えていった。第1号金の先制打に「素直にうれしい」と笑みをこぼした。

代打で起用された昨年は期待に応えられなかった。雪辱を誓い立ち上がった男は止められない。捕手（けんご）重来の物語はまだ始まったばかりだ。

6 KYODA SEIKI

■京田世紀（商4）
■聖光学院
■174ｾﾝﾁ70ｷﾛ
■右投右打
■.000

周囲からの信頼はピカイチの京田。対近大戦、負傷交代した4番井手に代わり三塁手で出場。急きょ訪れた出番だったが、守備機会を無難にこなしチームに貢献。さらに、チームが沈んだ時でもめげることなく京田は1人声を出し続ける。その姿こそが、彼の信頼につながっている。

「みんなの勝ちたい思いが伝わってくるし、その中でプラスの影響を与える選手になりたい」。彼からあふれ出るチームへの思いが、同志社カラーに染まるスタンドを熱くする。

8 TAKENAKA HIROKI

■竹中裕紀（商3）
■県立岐阜商業
■178ｾﾝﾁ73ｷﾛ
■左投左打
■.267

今季は、初戦から第2節までクリーンアップを任され3番に座った。ここまで打率、２６７と安定した数字を残している。

春には同立戦初のスタメン入り。1死二塁で適時二塁打を放ち、先制点をもたらすなど勝利に貢献している。3試合で9打数4安打4打点と大暴れ。立命大との相性は抜群だ。

シーズンを締めくくる伝統の一戦。勝負どころで光るバッティングで試合を決めたい。今宵、大歓声の中、同立戦男が誰よりも輝きを放つだろう。

闘将・澁谷卓弥

- 昭和33年生まれ
- 瀧川学園高校～同志社大学商学部
- 在学時は捕手、主将として活躍。明治神宮大会優勝、日米大学野球へ選出
- 平成23年滝川第二高校の監督に就任、2年目に甲子園に導く
- 平成26年同志社大学の監督に就任

戦力分析

打率	.271
得点	47
防御率	1.18
失点	16

立命館投打に充実

投打ががっちりかみ合いリーグ2位を走る。今季も「R」のユニフォームを着た好敵手が、リーグ首位の同志社ナインに立ちはだかる。

リーグ上位校の実力を支える打撃陣は今季も健在だ。1番の池内は出塁率、３９１とリードオフマンの役割をしっかりと果たしている。重量打線の中でもひと際目立つのが5番を任される辰巳だ。.４３５の高い打率もさることながら、ＯＰＳ１・１３２とチームの得点源を担う。辰巳を筆頭とするクリーンアップの前にランナーをためれば、大量得点は必至だろう。第6節の1回戦が終わった時点で、平均得点は４・５点を超える。破壊力抜群の打線で、相手チームを一気に打ち崩す。

投手陣は東と黒田の2人が中心だ。東は最速１４６キロのストレートと4つの変化球を自在に操る。ストレートで内角を強気に攻め、変化球を織り交ぜる。防御率１・５５はエースとして申し分ない数字だ。もう1人の看板ピッチャー黒田は、今季２４イニングを投げて失点1。勝負球は縦のスライダーだが、カットボールも併せ持つ。防御率はリーグトップの０・８２。キレ味鋭い変化球の威力が存分にデータに表れている。この2枚看板を打ち崩すのは至難の業だ。

リーグ戦を半ば終えて勝率は7割、高い数字を残している。打っても、投げても、立命大は油断ならない相手だ。序盤に先制点を取り、失点を防ぐ。同志社には勝利の原則をしっかり守ることが求められる。泥くさいように見えて堅実な道が、勝利への最短ルートだ。（滝川晴也）

※ＯＰＳ…得点への貢献度を示す指標。０・９を超えると優秀とされる。

回顧録

対近大戦（9・3，4）

わかさスタジアム京都で行われた第1節対近大戦。

一時は近大にリードを許すも、延長11回、山岸（法3）の勝ち越し適時打により逆転勝利。また、今季初登板の松井（法1）は2イニングを投げ抜き、初勝利をあげた。

2回戦では、今季初出場の福原（政策2）が先制2点適時打を放つ活躍。一時は同点に追い付かれるも、その後勝ち越しに成功し2連勝。今季最初の勝ち点を手にした。

対関大戦（9・17，18）

南港中央球場（大阪府）で行われた第3節対関大戦。先発・福島（法2）が7回2失点と好投をみせるも、エース・吉川を相手に1本が出ず完封負け。連勝は2でストップし、初黒星を喫した。

2回戦では、雨の影響により同志社打線が沈黙。福原のソロホームランによる1点のみに抑えられた。8回には投手陣も2四球2安打で逆転を許し、2連敗。今季3節目にして、早くも勝ち点を落とすこととなった。

対京大戦（10・4，5）

南港中央球場（大阪府）にて行われた対京大戦。負傷離脱の辻が戦列に復帰した。1回戦、まさかの先制を許すも、不振の平山が同点弾を放ちすぐさま追いつく。その後またも平山のタイムリーなどで勝ち越し、4―1で京大に先勝した。

2回戦。初回に井手の今季初適時打などで2点を先制した。投げては先発・平尾崇が京大打線を翻ろうし、11奪三振の完封勝利。2―0で逃げ切り、今季の勝ち点を2とした。

対関学大戦（10・9，10）

南港中央球場（大阪府）にて行われた対関学大戦。1回戦は白熱の打撃戦が爆発した。中軸の平山、西田悠が共に3打点を挙げ、今季ブレークの福原がダメ押しの2号3ラン。15―6で大勝した。

2回戦でも同志社らしい試合運びで、危なげなく勝利を収めた。初回に大西の適時打で先制すると、5回には福原、井手が適時打を放ち勝負を決めた。投げては平尾崇、福島がつなぎ、4―2で3つ目の勝ち点を奪った。

レイアウト 石崎 日奈子